故・髙田眞治教授記念号によせて

社会学部長　髙　坂　健　次

記念号が追悼記念号となることの痛ましさと口惜しさを感じないではおられません。故・髙田先生は、その生涯を関西学院で学ばれ教鞭をとられそこに捧げられたと言っても過言ではないでしょう。不帰の病の病床にあって、先生は奥様に「関学に出会い、神に出会い、そして家族に出会うことのできた幸せ」を語られたようですが、関学にとって、社会学部にとっても先生のようなかたに見い出してもらうことのできたことは幸せだった、と言わざるをえません。その別れが余りにも早かったことを除いては。

髙田先生は、関西学院の中学部、高等部を卒業後、関学の理学部化学科に入学され大学院も修士課程は理学研究科で了えられました。その後、「実験ばかりしていていいのか」との思いを募らせて一転して社会福祉学を志され、社会学部、社会学研究科と徹底的に「やり直し」をされたのです。その転身には「若干信仰的な背景があったかもしれない」と後に述懐しておられます。1974年には社会学部助手として着任され、その後75年専任講師、78年助教授、84年教授、86年前期課程指導教授、89年後期課程指導教授になられました。その間、80年には著書『社会福祉計画論』に対し社会学博士を授与されておられます。

ご専門である社会福祉原論でのご貢献をはじめ、日本社会福祉学会、日本地域福祉学会、日本基督教社会福祉学会、関西社会福祉学会、エントロピー学会、日本計画行政学会への寄与、さまざまな社会活動面でのご貢献は、各市の社会福祉審議会委員や会長、同和対策協議会委員、社会福祉法人一羊会理事、社会事業学校連盟理事、大学基準協会判定委員会専門委員、学位授与機構専門委員、等々枚挙にいとまがありません。2003年度から２年間は社会学部長を務められ、そのあと2006年３月までは関西学院理事にも就かれました。

故・髙田先生の告別式のとき、私は隣の席に座っておられた浅野　仁先生に伺いました。「髙田先生の趣味って何やったんですか」と。「彼はねー、小さな草木や花を育てたりするのが趣味だったようですよ」とのことでした。後日、芝野先生にうかがったところによれば、髙田先生は「バードカーヴィング」にも力を入れて楽しんでおられた由です。草花を育て、鳥を彫る、これらはいかにも髙田先生の趣味というにふさわしいという気がいたしました。前夜式で司式をなさった湯木先生は髙田先生のことを「清廉」「誠実」「温厚」といった言葉で表現されたかと思います。私の印象もまったくそのとおりでありました。

浅野先生が「そうそう、彼は大型自動車の免許をもっていたらしいよ」と付け加えられ、その時から私の妄想は膨れ上がり、今も止むことがありません。髙田先生が病の床に臥されたのは2005年学部長職を全うされた直後でした。学部長職には誰にもみだりに漏らすことのできない事柄やストレスがつきものです。「清廉」「誠実」「温厚」だけではとても耐えられなかったこともあったのではないか。私の妄想は、髙田先生が教授会のあった日の深夜、トラックをブッ飛ばしてストレスを解消されていたに違いないというものでした。むろん、現実にはありえぬ妄想ではありましょうが、私は何故かその妄想に思い至ったとき、ほんのわずかですが救われたような倒錯した気持ちになったのです。

2008年度には社会学部のなかの社会福祉学科が母体となって「人間福祉学部」を立ち上げます。それは喜ぶべき船出ですが、この船出に髙田先生の存在があればどんなにかよかったことでしょうか。残念でなりません。髙田先生は髙田社会福祉原論の集大成として斯界の高い評価を受けられた著書『社会福祉内発的発展論』のなかで、「社会的に弱い立場にある人が、その弱さゆえにさらに虐げられるようなことがあってはならない。社会的に強い立場にあるものが、その強さゆえに弱いものを痛めつけるようことがあってはならない」と述べておられます。

社会学部じしんも現在「内発的発展」に向けて努力を重ねています。日本社会も行方は杳として定かな

らざる要素を孕んでいるようにも思えますが、日本の社会福祉が今一度髙田先生のおっしゃっているエコロジカルな発想を取り入れて発展していけばよい、わが社会学部、人間福祉学部が相携えてそうしていかなければならない、と思います。どうか私どもの歩みを見守り、道を踏み誤らぬようお導きくださいますように。

「馬槽のなかに」は故人愛唱の讃美歌の一つであったと伺っています。

食するひまも　うちわすれて、
しいたげられし　ひとをたずね、
友なきものの　友となりて、
こころくだしき　この人を見よ

私の瞼にはいつしか故・髙田先生の姿が浮かんできてしまいます。